

神奈川県考古学会

# 考古かながわ 第61号

2019年1月16日

「月見野遺跡群発掘調査から50年」に際して

工藤 悠大

月見野遺跡群は、大和市つきみ野を流れる目黒川両岸に広がる遺跡の総称であり、日本考古学会史に特筆される著名な旧石器時代遺跡群です。

昭和43年（1968）の明治大学考古学研究室による発掘調査から現在に到るまで、数多くの発掘調査が実施されています。

月見野遺跡群の発掘調査はつきみ野周辺でおこなわれた土地区画整理に伴うもので、土地区画整理工事により地表面下約1.5mまで堆積している黒土だけでなく、その下の赤土（関東ローム層）まで掘り下げられました。その結果、関東ローム層中に存在する旧石器時代遺跡が広く露出しました。

区画整理中の昭和43～44年（1968～1969）にかけておこなわれた明治大学考古学研究室による発掘調査は、日本の旧石器時代研究の大きな転換点となりました。それまでの旧石器時代遺跡の発掘調査が「単一遺跡・小範囲」を対象としていたのに対し、月見野遺跡群では「複数遺跡・広範囲」を対象に大規模な調査をおこなうことができました。

月見野遺跡群で出土した最も古い石器は、地表面下約4.5m、いまから約3万年前の地層から出土しています。そこから、隆線文土器が出土した地表面下約1.5m、いまから約1万年前の地層まで、連続して遺跡が発見されています。そのため、日本の旧石器時代の主要な道具である石器の変遷がよく理解できます。

現在、月見野遺跡群の所在地は閑静な住宅地に

なっており、遺跡の面影を見ることはできません。しかし、大和市文化創造拠点シリウスの5階にある地域資料コーナーにおいて、発掘調査で出土した資料が展示されています。

ここでは、昭和54～57年（1979～1982）に、つきみ野市営住宅の建設に伴い発掘調査がおこなわれた月見野遺跡群上野遺跡第1地点および同第2地点の出土遺物が展示されています。

月見野遺跡群上野遺跡第1地点では、昭和54年（1979）の発掘調査中に、関東ローム層最上部の土器片が出土しました。それまで日本最古の土器は約1万5千年前の隆線文土器であると考えられていましたが、上野遺跡第1地点では、隆線文土器が出土した層より20～30cm下の古い地層から土器片が出土しました。同年に長崎県佐世保市の泉福寺洞穴から発見された豆粒文土器とともに、隆線文土器を超える日本最古期の土器であるとして、新聞の一面で大きく報道されました（昭和60年（1985）5月22日、毎日新聞）。

地域資料コーナーでは、その日本最古期の土器片と石器、地層の剥ぎ取り標本なども展示されています。ぜひこの機会に大和市文化創造拠点シリウス5階 地域資料コーナーの展示をご覧ください。とはいかがでしょうか。

# 考古学雑記

神奈川県の考古学・埋蔵文化財の発展に寄与してこられた諸先生方にお話を伺うコーナー。今回は元 神奈川県立博物館学芸員の川口徳治朗さんです。

## 1. 考古学を志したきっかけ

——鎌倉学園（鎌学）のご出身で、考古部の第3代の部長をされていたと伺っております。

考古学部って名前だけでも、実際には歴史好きな人も考古学部に入って活動していました。初代が明治を出て北海道大学の先生になった旧石器の吉崎昌一さんと、吉崎さんが明治大学に行ったから、岡本勇先生が考古学部を指導してくれて、大丸遺跡おおまるを鎌学の生徒が掘っているんです。ほかにも横浜の戸塚あたりや茅ヶ崎で言えば堤貝塚あたりを掘って学校に置いてあって、卒業した後ですが、鎌倉学園の部報に後期の土器2点を「鎌倉学園堤貝塚出土の縄文土器」と紹介しました。

私の現役時代に指導してくれたのが藤沢の湘南考古学会で寺田（兼方）先生などのお手伝いをしていた原信之さん。原敬の孫で、早稲田で縄文早期の研究勉強をしていた時に鎌学に来て色々指導してもらった。藤沢の遠藤貝塚を掘るときに声をかけてくれるとか、卒業してからも個人的にも指導してくれて。だから割合と鎌学は考古学の歴史があるんです。

### ○大好きだった野球の道を断念して

僕がもともと鎌学に入ったのは野球をやるためだったんです。野球が大好き。その頃の鎌学は決勝、準決勝で惜敗するチームで、選抜には行くんだけど夏は行けないっていうんで、私が行けば夏行けるだろうと入ったんだけど（笑）、一年生に入る直前に腰を痛めちゃって野球部を断念したんです。それで、塞ぎ込んでられないって、歴史のクラブに入ってみようかなと思ったら、考古学クラブしかなかった。そこから始まったんですね。

### ○悩んだ進路からの転機

でも、考古学を大学まで行ってやろうという気持ちはなかったんです。野球挫折でたまたま入ったクラブをやっているうちに、例えば学校の文化祭で縄文住居を造ったり、古墳を造ったり。そうすると神奈川新聞に取り上げられる。でもそれはやりたいっていうものじゃなく、仕方がなくやっていて（笑）。

実は僕、高校一年に入ったとき親父を亡くしまして、もしかしたら大学には行けないくらいのつもりでいたんです。だから大学に行くんだったら、もう少し社会の役に立つ仕事をしたいと法学部を考えていました。



そしたら高校3年生の夏が終わって学校行くと、考古学部の部長の井上隆男先生に「すぐに校長室に来るように」と言われて、いやー（笑）、夏になんか悪いことした覚えはないんだけどな〜って行ったら、「キミは考古学部の部長やっているけども、新聞にも出て、好きなのか」と言う。「いや嫌いじゃなけど好きでもないです、もうこれでやめます」って返すと、「実は神奈川に県立の博物館ができるが、そこで考古学をやっている若い子を取りたい、それも育てていきたい、そういう子を探している」と。それで、これだ！と思って、すぐ家へ帰って、お袋に話して、もう一切心配するなど。就職すると。それが県博に入ったきっかけです。

——当時はそうした育成が多かったのですか？

お役所、県庁とか市役所とかは夜学生が多いんですよ。例えば行政職の人は仕事が速やかにできるように、夜学の法学部や商学部に行ったりするサポート体制が良くできていました。ですから私もその話を聞いた時に、専門的な知識を付けなくてはいけないから、大学に行ってもらうことが条件だと。それで行くに当たってはその時間を融通つけるからと。あとは大学はどこ選ぶかって話で、当時は二部を持つてるのは立正と明治と早稲田くらいしかない。それで先生方も良く知っているから、是非どうかっていうんで、明治に行くことに。

## 2. 博物館勤務と学生の両立

博物館に勤めると神澤勇一さんという人が研究室の先生で、もう一人寺田恵子さんという女の人が私の上にいて、オール明治で私が一番下。だから否応なしにやられるわけですよ（笑）、厳しく。それで学校行って勉強させてもらってってすごく恵まれていますよね。24時間考古学をやっているようなものです。

仕事場には神澤さんがいて、私が入ったのは博物館になる前の年だったから、いろんな仕事があって、とても忙しい。展示計画を練っているときに、縄文、弥生、土師と、いろいろやるでしょ？そうするとヒヤッとね、「川口君あそこの堀之内の2の深鉢もってきて」と言われる。いやわかんない(笑)！入ったばかりでわかんない！棚見ていやーわかんないよと思って。当時は縄文なのか弥生なのか、違いも判んないですよ。しょうがないから「先生これですか？」と持っていくと、「違うだろこれは！」って。

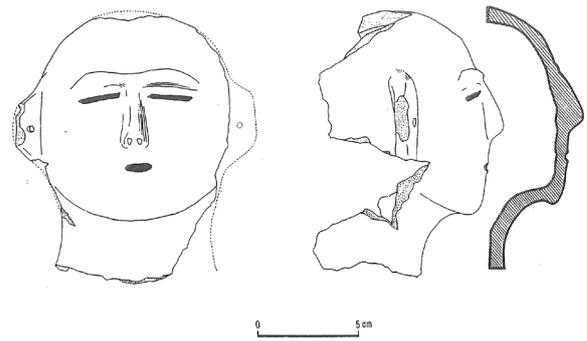
それならばと、夜に大学に行ったら、授業の合間に大学の先輩や研究室の先生のところに行って、堀之内の深鉢の土器はどれですか？と聞くんです。そうすると、わかんないのかと言われながらも、これだこれだと教えてくれる。そうしたら自分でノートを取って、これがすごく勉強になった。一年生でそんなこと教えてくれないですからね。石器になったら余計わからない。そうするとまた研究室に行く。その繰り返しが私の考古学の何よりの勉強になりました。

### ○神澤勇一さんのもとで

神澤さんて人は、すっごく厳しい怖い人なんですよ。「バカバカバカバカバカ！」って(笑)。だからしょっちゅうハラハラドキドキ。要するに考古学の勉強を教えてくれるわけじゃないから、もう仕事しながら覚えていくしかないわけ。彼が展示計画を練りながら、論文も書きながらやっている横で、私の仕事っていうのは鉛筆を削ること。一日中。HBだと硬くて肩が痛くなるから、使うのは4Bなんです。それで原稿をドンドン書いてポンポンポン飛ばしてく。そのための鉛筆を削っていく。それで鉛筆の芯の長さは木のところが何センチ、芯が1.2cmとか指定される。それをやりながらあれを取れこれをやれ、お茶を入れる、肩を揉め、湿布を張れ、5分で弁当食えとか(笑)。だから昔でいう本当の徒弟制度みたいなね。それはもう杉原壮介先生が厳しい人だったから。その直属だから、尾ひれが付いちゃうんですよ。

出張の際も、土器の破片をバーンと置いて、これを明日までにと行って、一日で終わらない量出す。そして終わらないと、なんで終わらないのか、プロじゃないって。ルーペで見るんだよ。そういう人。

弥生のひる畑の人面土器って知ってますか？横須賀にひる畑、宮ノ台ってあって。あれを神澤さんが『東京考古学集刊』に出して紹介したことがあったんですよ。実測は自分でしたんだけど、「これ君がトレースしろ」っ



ひる畑遺跡出土の人面土器（神澤勇一 1968 より）

て言うの。当時はGペンでやるんですけど、烏口は使わせてくれない。Gペンの太さを4種類くらいに分けて、削りながらやるってのは芹沢長介さんに教わった。それで、やって渡すんだけど、「なんで一枚なんだ」「ダメだと思ったものも全部出せ」と言う。それを見てペーッと赤を入れていく。そして、100枚以上書いたそれを捨てるなど言う。自分がいかに幼かったかを勉強のために取っておけと。それで一番いいなと思ったやつを採用したのが、考古学集刊にでてるアレ。だからあれは僕が20歳くらいのときかな。

——これはぜひ掲載させていただきます。

### 3. 卒論の題材を選んだ理由

——卒論は縄文の貝刃をテーマとされたようですが。

県博の研究報告の第4号、第5号に出ている論文は、神澤さんと共著になってるけど、これは私の卒論なんです。神澤さんが、指導したから共著にするぞって言って載せちゃったの(笑)。ああそれで結構ですって。だからその論文に卒論とは書かれていない。

これを選んだ理由は、神澤さんが弥生をやっている人じゃないですか。当時、僕の卒論の担当は戸沢(充則)先生で、私が縄文の貝刃と言ったら、「なんでそれをするのか、きみは神澤さんのお弟子さんだから弥生をやるんじゃないのか」と言われたけど、理由は言えなかった。だけど、やったら卒論は書けないと思っていた。もう指導に指導が入っちゃうから。とてもじゃないけど間に合わなくなるというのがあって、縄文をやることにしたんです。

神澤さんは吉井貝塚とか、縄文も少しは研究報告の中に書いてるんですよ。そのなかで貝刃や骨角器についても触れてるし、そういう意味では指導も受けられるかと、私としては非常に良いテーマを選んだと思う。弥生をやったら書けなくなる。何人かね、卒論の指導を受け

に来て、書けなくなっちゃった人がいます。

### ○技術を盗む

とにかくちゃんとは教えない。こうしろ、ああしろではなく、見てきて、ダメッ！と。現場の測量とか実測なんかも全部そう。そういったものは教えてもらうものじゃない。盗むもんだと。自分がそうやってやってきたから。

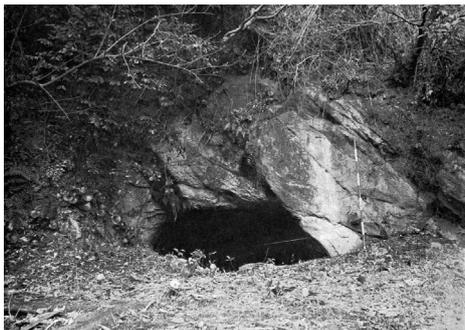
だから早稲田にいた岡田威夫さんとか、図面をすごく細かく取る人の発掘を観察して、今度あの住居址の実測するぞ、セクション取るぞとなったら、ハイっ！と手を上げて、やらせてくださいって。そうするうちに、じゃあ次は図面を取れとか段階を踏んでやらしてくれる。岡田さんがいく現場にお願いして顔を出すと「川口君測量手伝え」とやらしてくれるんです。お、しめた！と。

神澤さんも実測図がまた上手いんですよ。神澤さんは芹沢長介さんに叩き込まれてるから。そうするとニュアンス作りなんかを覚えるには、「神澤さんすみませんけど報告は縮尺2/3で出ますけど、もしよければ原図見せてもらえませんか？」って聞いて、今度持ってきてやるってなったら、原図見ながら覚えるのが一番いい。あとはこっそりコピーとってパッと返してね。それ見ながら骨角器やなんかの実測の仕方を覚える。教えてくれないんだから、そりゃ見るしかないですよ。盗むんです。それで時間がないから短い時間の中でバンバンやる。

### ——当時としても川口さんだから出来たことでは？

いやいや。だから私は恵まれてるんです。傍にそういう人がいるから。だから原（信之）さんもそうだけど、寺田先生もそう。寺田先生はものすごく怖い先生なんです。あの当時はもう口もきいてくれないくらい。今はもうああいう良いおじさんになってますけど、現場で一喝されちゃう。高校生なんかでも失敗でもしたらバカモンでやられて。でもそのあと藤沢の湘南考古学会ができて、誘われて、寺田先生のお手伝いをずっとやってて。

だからいま藤沢市の文化財委員やってるのは寺田先



間口洞窟の概観（県博報告書より）

生の指名で、藤沢に何かあるときに書いてくれとか、会報のスペース埋めてくれるって言われると、や

ります！って。それもまた勉強。弥生の土器書く時には神澤さんの目の届くところには書きませんので、湘南考古学会に書きますって。それで県博に書くときは縄文を書く。そういう風に分けていた。

## 4. 思い出に残る遺跡

——県博に入られてから遺跡の調査などもされておりますが、ご自身の中で最も印象に残っている遺跡は？

やっぱり僕は縄文でやろうと思ったのは、梶山貝塚を掘ったのが大きい。それできっと考古学をやっているという気になったのかもれない。梶山遺跡は、一角に前期の貝塚があって、全部で梶山は5次くらいまでやってるんだけど、そのうちの一つだね。それが一番あって、もう一つはやはり間口の洞窟遺跡かな。最後は横穴。実測を主体として大磯丘陵の横穴を集成したやつ。印象に残っているのはそこだね。

### ○ピンセット発掘

ただ、それぞれの発掘調査は、いわゆる学術調査なんです。博物館というのはテーマを持ってテーマに基づいて念入りに調査していく。それで焦らずに一年やって、面積もそんなに掘らないで、その間に整理をして、その成果をふまえて二次調査をと。そういう調査を行う。

神澤さんが立派なのはそこなんです。他も立派なんですけど、博物館の仕事というのは何なのかっていうのを非常に考えている。そして学術的な調査をピシッとやる。丁寧に。いわゆるピンセット発掘とか竹筴発掘って言い方ですよ。バンバン掘らないで一日に30cmしか掘らない。間口なんか30cmほどだった。ピンセットでピッピッピッてあげていだけ。それで一日終わっちゃう。そういう調査。そんなことがやれた、県内では最後の発掘かもしれないね。

### ○デスクワーク

また、発掘以外の調査研究ってのはいわゆる資料をまとめる仕事なのだけど、それが神奈川県考古集成。縄文土器、弥生土器、土師、須恵の集成をやったりした。これは神奈川県で出ているそれぞれ土器の集成をして、その地域性だとか時代性というものを見ていって、学術的に役に立てて貰おうというもの。これをやれるところはやはり博物館しかないと思う。だからフィールドワークとデスクワークの大きな二本立て。

それからもうひとつしなきゃいけないのは文献の集成だね。文献の集成をきちっとしなければ後世の人の役に立つことをしたとは言えない。それは神奈川県

文センターができた時に、そっちが積極的にやろうとの意志をもって、文献センターみたいなものを埋文センターの中に入れて、考古学をやりたい人はそこに行けば文献のすべては見られる、あるいは無ければどこに行っても見られるとかっていうのをやった。できればそこまでできちゃうのが一番いいかなと思ったんだけどね。

だからいずれそういう時代がくるかもしれないですよ、もう一度、出ているものを施設や機関が時間をかけながらまとめていく。1年じゃできない仕事だから、3年とか5年位くらいかけなきゃいけないから、そういうのは博物館しかできないですよ。同じ人間がやらないと、集成ってできないから。

だから神奈川県貝塚を学ぶ会というのはまさにそれだよ。1年ずつ歩いて7年かけて集成して。たまたま私が県博にいたから、じゃあ最終的に県博でまとめるかたちを取りましょって。あれですべてが終わったわけじゃない。基礎的な作業だから。

——今日を機会にまた会を再開することになりましたので（笑）。会長と。（中村）

## 5. 神奈川県貝塚地名表の発刊

——その貝塚を学ぶ会から発刊されたのが『神奈川県貝塚地名表』ですね？

貝塚を学ぶ会が発足されたそもそもの切っ掛けは、三浦で諸磯遺跡調査100年記念の展覧会とシンポジウムを三浦市教育委員会の須田英一さんたちがやってね。横須賀の野内秀明さんと私と桜井準也さんなどが発表者になって。そのあとの飲み会で、これで終わっちゃうのは勿体ない、少し貝塚について突っ込んだ話をやりませんかと言われて始まったんです。何かの機会に、最初は7.8人くらいが県博に集まって。

私の気持ちとしては、まずは今我々が持っているテーマを深めていきたいというのがあって、一般の人は少なかったですよね。殆どは仕事を持っている人と、学生と紹介くらいで。2、30人かな。それで5年くらい、夏以外は毎月歩いた。

——横須賀からスタートして海岸沿いを

一応、紹介されている貝塚は消滅していても現場確認をして、確認されているところはほぼ歩いたんじゃないですかね。歴史時代のものも含めて。それで5年くらい歩いて、最後まとめるのに2年くらいかかったかね。

結局は、皆熱心で好きなんだね。行政の人って日頃仕事に追われちゃうじゃないですか。ところがこの会は考

古学を勉強してるって意識が強くて、土日を楽しみにしてる人が結構多かった。途中からでも、飲み会だけでも参加して。飲み会は必ず終わったあとやって、そこでまた情報交換。そういうことを繰り返し皆でやったから、あの当時としてはできる限りのことはできたのかなと思いますよね。本当はデータ化できればよかったんだけど。

いろいろ癖のある人はいたんだけどね、喧嘩することはまず無いし、アイツが来るからヤダとかも無かったですよね。大体、年末になると中村若枝さんの家で忘年会やって、新年会やって。中村さんがすごい料理を作ってくれて、それがまた皆楽しみで。おいしいお酒を飲んだりしてね。僕もあれでもうドクターストップがかかりました。

## 6. 神奈川県立博物館の展示リニューアル

——展示リニューアルを担当されたとお聞きしました。

僕は当時、神奈川県立博物館のリニューアルの全体のチーフだったの。だから考古は考古でやるけれども、もうひとり国平健三さんがいて、全体をやっていた。

「神奈川の文化の変容」という大きなテーマで、変容とは、私の解釈ではどう良くなっていくのかということ。これを歴史の中で提示しようってテーマでやってた。もちろん駄目なものは淘汰されて、良いものは残って発展させていく、そうやって人は文化ってものを築き上げてきた。それを展示の中で出すのがコンセプト。だから、それから外れるものは除外していかないと、何でもかんでもの膨大な展示室になってしまう。

もちろん、発展するにあたって削除された部分を出さないと発展の様子が分からないもの、それは出す。だから資料の選び方もそう。大学の文化祭じゃないんだって僕はいつも言うんだけど、土器を5個も6個も並べる必要はないんだ。この土器1個でもわかるんだったら並べるな。この土器を説明するためにはこの土器が無いと説明できないっていう場合は2個並べる。例えば一住居址のセット関係だったらそれは10個だって並べる。そういう選択をしなければ展示は広がりすぎちゃう。

それは博物館学をやっている人ならわかるんだけど、目の高さ、キャプションの数、壁面につける写真の数、すべて学芸員の力なんです。ゆとりがない展示をすると目が疲れちゃう。見るのは大体中学生から高校生くらいのレベルでやるから、難しすぎるとか、字の大きさとかが全部、そういうのは総合チェックなんだ。だから自分で言うのもおかしいんだけど、やっぱり学芸員としては

3年くらいではそういう知識は養えない。最低10年くらいやらないと出てこないと思う。

展示の手法から逸脱したようなものは学芸員の自己満足。そんなのは自分が満足してるだけで、見た人は何も感動しない。そういうのを1回パーッと見る。考古の展示なら考古の展示。2回周るんです。次は博物館学的に見るんです。それが僕のやり方。だから、良いとか悪いとかは、たくさん見て自分なりの評価を自分の展示に出していく。

——**県博は、のちに歴史（県歴博）と自然（生命の星）に分かれましたが、その辺りの事情は。**

そもそも現在の県博は当初、歴史系の博物館を造る目的で動いてて、途中から、この際、自然系も入れた総合博物館にしたかどうかという転換があった。そうすると展示室も収蔵庫もスペース的な余裕はないから、将来的には分離・分担しないとねって話はあった。実際に開館して2年か3年で満杯状態という事情が出てきた。

そんな時、自然系で個人のコレクションを寄付したいという人が現れたんだけど、収蔵庫が満杯で置けないからと断ることになってしまった。自然系は収蔵庫の自体のスペースが少なかったから。それを県の議会でスクープされたんだね。議会ですらそういう質問があって。当時の教育委員会が検討すると回答した。

——**それで小田原に。**

場所は辻堂の演習場があって、今の辻堂公園かな。その場所とか候補に挙がったんだけど、塩害が強いんで博物館には不向きだと。それで小田原の入生田の方はどうかとなって独立したの。でも自然系自体少なかったから、そんなには充足されなかったんだよね。

## 7. これからの考古学に思うこと

——**現在は藤沢市の文化財委員や県考古学財団の理事などのお立場に立たれておりますが、現在の神奈川県の考古学や若い世代に対して思うことをお聞かせください。**

僕はね、60の定年を過ぎて自分ではすべて卒業と思っています。論文なんかについても一生懸命やるようなことはもういいと。とは言っても、やらざるを得ないことはありますが。

言いたいことは特にないのだけど、僕が一番問題だと感じてるのは、我々の世代の人が、若い人を育てて

ないなということ。その責任はすごく感じている。川口さんのお弟子さんは？と聞かれたときに誰もいないなど。

これはあるいは良いことなのかもしれない。けれども、反省として思うのは、この世代と話をすると、若い人を批判しちゃう人がいる。今の若い人はとか。それに対して、そうじゃないでしょう、あなたや僕が育てられなかったんでしょうと。僕はそう感じる。

これは無責任に言っちゃいけないんだけど、学生運動の時代に育ったことが非常にネックになってる。というのは、私たちがそういう先生に出会ってない。だからこそ自分たちもそのやり方ができないんです。

ところが我々のさらに前の世代はそういう形ですつと通ってきて、神澤先生でいえば、杉原壮介先生とかに育てられてきている。我々はその先生から、ちゃんと研究室で地道に育てられていない。だから自分たちはそのやり方を知らないんですよ。

一方で、この世代は自分のことは一生懸命やるんです。だから自分としては良いけど、自分が終わった後、それを誰に託すのかって。全部渡して、頼むぞって言う人は育てられてないんですよ。そんなの知らない、誰かがやればいいという人がいるかもしれない。でもそうじゃないんじゃないかな。

これは、自分がちゃんとできてるって言うわけじゃなくて、私はたまたまそういう上の人が出たから少しは恵まれてる。だから恵まれてるというのはそういうことなんです。少しは構ってもらえたなというのはある。

我々なんてすぐ愚痴っぽく言う人がたくさんいるじゃないですか。それをフーンと聞いててね、あんまり言うとな、ちょっと待ってって（笑）。それは胸に手を当てて考えることがあるんじゃない？って。その子はあなたの部下や後輩でしょって。そうさせたのはあなたじゃないの？って。と、そう思います。

（2018年9月9日収録）

## 注記

川口さんは連絡誌の初代担当を務められ、第1号の題字は川口さん直筆の毛筆書体を参考に、活字を見繕ったというお話もお聞きしました。そこで今号は特別に第1号の題字をリバイバルしております。

平成 30 年度第 2 回見学会参加記

鎌倉歴史文化交流館「出土漆器の美」・  
明治150周年記念古写真展「激動の鎌倉」

村澤 正弘

2018年11月24日（土）、紅葉が進む中、秋晴れの古都鎌倉の見学会に参加しました。混み合う小町通りとは反対側の鎌倉駅西口から閑静な高級住宅街を通り抜けた場所に鎌倉歴史文化交流館がありました。場所的にメイン地域ではなかったのですが、館にはまばらですが訪れる人がいて、古都を散策する中でふと出会う場所というところでしょうか。この建物は著名な建築家ノーマン・フォスター氏関わった建築物ということもあり、個人邸宅として設計建設されながらもゆったりとした空間に間仕切りがされ、その空間にマッチした展示室、そして企画展示でした。デザイン的に洗練された現代建築の中で「企画展 出土漆器の美」が開催されていたことあるのでしょうか、発掘調査で出土した器とはいえ、美術館の一般美術工芸品を見ているようでした。黒漆地の上に朱漆で描かれた図柄、黒と赤で織りなされる和文様に惹きつけられました。また、漆器製作に携わる職人である塗師の道具類が展示されていた他、今回はなかなか公開されない鎌倉国宝館所蔵の伝世の鎌倉彫や調漆なども観ることができました。鎌倉は地下水位が高いということもあり、日常生活で使用した漆器が普通に出土するとのこと。他の地域で調査され、出土する中世の器と言えば、土師器に似たカワラケという土器です。漆器などの木器は鎌倉のように低地でなければ現在まで残ることはありません。案内していただいた浪川副館長さんは、カワラケを器に使うのではなく、一般庶民の間でもこのような漆器



などで食していたのでしょうか、と話されていました。中世の中心地であった鎌倉ならではの一品を堪能することができました。他の地域の博物館では、古文書も含めて漆器などの木器類などの遺物がほとんどないことから、中世の時代を飾るスペースは非常に小さいのですが、ここでは、これこそ中世文化！！という感動を覚えました。

「激動の鎌倉」という古写真展では、幕末・維新期から明治初期にかけて、鎌倉の姿をコンパクトにまとめられていました。幕末期、西郷隆盛らが勅使先鋒として滞在した地であり、また廃仏毀釈の地として、まさに激動の時期の様子を古写真の中から得ることができました。特に幕末(1964年)に英国人2人が浪人に殺害された鎌倉事件直後の様子と思われる古写真があり、興味を惹かれました。

鎌倉歴史文化交流館

春季企画展「鎌倉 Disaster 災害と復興」

2019年1月4日（金曜日）～5月18日（土曜日）

## 遺跡発表会にかかる要望書の提出

2018年11月18日(日)におこなわれた本会主催「第42回神奈川県遺跡調査・研究発表会」に際し、開催日直前に栄区No. 68遺跡の発表者から「発表要旨の掲載文を取り下げたい」という申し出がありました。事由は、事業主(横浜市道路局)から、「(報告書刊行前なので)口頭発表は構わないが、文章で残すことは避けるように」という話があったためです。

報告書刊行前に速報というかたちで成果を公開することは広く一般的におこなわれており、神奈川県遺跡調査・研究発表会は42回を数える当会の根幹をなす活動のひとつで、横浜市教育委員会からも後援を得ています。その根幹を揺るがす事態に、到底納得できる事由ではなかったのですが、交渉する時間的な余裕がなく、印刷も終了しており、苦肉の策として該当箇所を切り取ることで、対処せざるを得ませんでした。

本会は、神奈川県を中心とする考古学の創造的な調査・研究ならびに文化財の保護、普及および啓発ならびに会員相互の親睦を図ることを目的としています。文化財保護法に則った活動をおこなう中で、今回の件で本会と会員は物心両面で不利益を被りました。

つきましては、このような事態が今後二度と起こらないよう、文化財保護法の理念に基づき、事業主に文化財の活用に積極的に取り組むよう指導を重ねることを強く要望するよう、横浜市教育委員会生涯学習部文化財課文化財係に要望書を提出しました。

## 役員募集

今年度末をもって、役員数名が任期満了となります。これに伴い、2019年度総会において、役員の変更をおこないます。神奈川県考古学会の運営に携わってみたい、自分で企画や事業を実施してみたい、小さいことからでも協力したいという会員の皆さま、この期に役員になってみてはいかがでしょうか。自薦、他薦は問いませんので、やる気のある方はご連絡ください。

## 新会員募集

役員とともに新会員も募集しております。考古学に興味がある。自分で遺跡などを調べている。神奈川県内の発掘調査や研究について知りたいなど、周りに興味のある方がいらっしゃいましたら、ぜひ会員になることを勧めてみてはいかがでしょうか。ご連絡は奥付の総務アドレスまで。新役員応募の方も同様をお願いいたします。

## 編集後記

今回は、発掘調査から50年を迎える大和市月見野遺跡群について、講座に合わせた遺跡の概要を載せさせていただきました。月見野遺跡群が発見されてから半世紀が経つことになり、感慨深く感じる方もいるのではないかと思います。また、考古学雑誌では、元神奈川県立博物館学芸員の川口徳治朗さんから当時の博物館や大学での経験、携わった遺跡について貴重なお話を伺うことができました。本年も神奈川県考古学会をよろしく願いたします。

## 考古かながわ 第61号

発行 神奈川県考古学会  
発行日 2018年1月16日  
印刷 (有)湘南グッド  
発行者 神奈川県考古学会 会長：岡本孝之  
編集 連絡誌担当(古田土・工藤・西田)  
郵便振替 00240-9-71208  
E-mail soumu@koukokanagawa.com  
URL <http://www.koukokanagawa.com>